

連載最終回

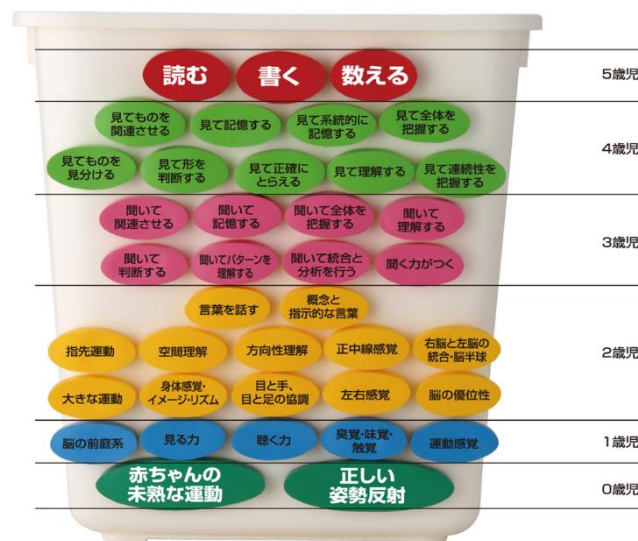
具体的な指示は子どもに分かりやすい

子どもにこのような指示をします。「さあ、頑張って遊ぶよ。遊んだらこんなカードあげるから」というグループと、二つ目のグループには「おもちゃで遊んでね。片付けてね、カードをあげるからね」と具体的に何をするかを伝えます。どちらが継続的に自ら遊んだかという、頑張れと励ました子どもたちはあまり遊びません。先生は具体的に何一つ示していないからです。ところが絵本を読んでね、片付けてね、と具体的に指示した子ども達の遊びは継続します。

目に見えるように具体的に示すのです。保護者に対して同じで、今日はこのような保育や具体的な支援をしましたと伝えます。情報をたくさん与えられた保護者は子どもにかかわる回数が多いのです。

決め手は一人ひとりです。私たちは、皆一緒にすることには抜群の能力を持っています。しかし、これからは皆一緒から、一人ひとりの発達を確実に保証する時代です。1人として落ちこぼれをつくらないという意識です。

乳児期からの子どもの脳の働き方と保育活動の関係を図にしました。



0歳、多様な愛着です。親と子がぴったりと母子関係をつくるのではありません。母と子の母子関係は一元です、あやふやなものです。ずっと続くのは多様な愛着なのです。いろいろな保育者と関係を持った愛着をゼロ歳児のときにつくっておくのです。

1歳児は、子どもから次第に聞き取る力がなくなっています。3歳児の50パー

セントが 10 時まで起きてテレビを見ています。赤ちゃんも 11 時だと聞きますが、寒気がする話です。騒がしい音環境の中で育っていますが保護者はあまり気にしていません。そしてほとんど語り掛けていません。聞きたくない音も聞きたい音も一緒くたに脳に入っていきます。言語発達にとって重要な時期です。

2 歳は脳の働きの優位性、例えば、右利きか左利きかが決まり、微妙な巧緻動作といわれる指先運動が活発化し、脳の前頭前野と呼ばれる想像力やイメージを司る領域に刺激を与えることがわかってきました。巧緻動作を養う方法は体全体を使う粗大動作が必要です。歩くことです。

3 歳は耳を育てます。聞こえてはいるのですが、何がいわれているのかがはっきりしない子どもが増えています。先生と個人的に対応ができますが集団的には難しい子どもです。聞いたものを判断するためには脳の聴覚野を絶えず耕します。基本はコミュニケーションです。話しかけてもらう、言語的な表現に耳を傾けて貰うチャンスが多いことが大切です。

4 歳は見て判断する力です。このような実験があります。視覚力のある生まれたばかりのひな鳥の目に、包帯で目隠しをして半年間育てます。包帯を取っても目が見えなかったそうです。

子どもが近くのをうまく見ることができるかどうか、一目でスムーズにプリントの線をたどれるかどうかを調べるのは重要です。子どもが両眼を通してしっかりした 1 つの像を見ることができるよう、眼はレンズを収束させ、一定の時間じっと見つめることができますか？

5 歳児は小学校で必要とされる、座って先生の話聞く、鉛筆を握って書くようなことが求められます。なぐり書きを始め描写力が出てきた子どもの保育報告です。参考にしてください。

「なぐり描き状態から、とじた丸が出るようになり、タイヤ、チョコレート、ドーナツ、ブランコ、おだんご等、本児の生活やあそびの中での好きなものが出るようになったのも大きな変化だった。描いた絵を保育者に見せ、自分の描いたものを言葉で伝えることを繰り返す中で、遠足でのバスや、バスの中の人を表した丸が、現れるようになってきた。」

ご清聴有難うございました。(完)